

' 71.1月

井深対談

“生物時代”にこそしつけを

ゲスト：坂田 道太

坂田 道太（さかた・みちた）
文部大臣

“教育”で、ひらべたいものにする

- 坂田** さきごろ、イギリスとフランスとドイツと、新しい大学を見て回ってまいりました。
- 井深** ああ、そうですが。英国は特に見るべきものがございましたでしょう。ところで、大臣はだいぶ幼児教育に一生けんめいでいらっしゃるようで……
- 坂田** いやいや、それよりむしろ、きょうは、井深さんの幼児教育論をおききしたいと思っています。私のは全く勝手な、我流でやっとなるようなものですから。きょうはいい機会ですから、いろいろ実験的なことや、お考えやらぜひ伺わせてください。
- 井深** 私、何故、幼児教育を手がけはじめたかといいますとね、私の会社としまして、小学校の理科教育振興資金というのを……
- 坂田** はい、はい、もうずい分長年……
- 井深** ことして十五年になります。金額で総計、かれこれ三億円ぐらい使っておりますがね……
- 坂田** ああ……そうですか。
- 井深** これは何故、始めたかと申しますと、はじめ大学とか、高等学校とかも対象として考えたんですけどね、どうもピンとこないんですよ、ね。で、いろいろ考えてましたら、どうしても、小学校でちゃんとやるのが、一番効率がいいんじゃないか、と……そういうことから小学校とおつき合いを始めまして……ま、十五年もずうっとやっておるものですから、小学校の様子は、だいぶわかってきました。理科教育においてすら、小学校の特に一、二年っていうのは、非常に有効な働きをしているんですね。
- 坂田** なるほどね、うん。
- 井深** そんなことから、だんだん、もうちょっと先へ……と、幼稚園で理科教育を、どう考えたらいいかな、といったことを考えてまいりましてね。
- 坂田** はい、ええ。
- 井深** それからまた、小学校で、理科だけについてやっておりましたけど、どうしても、これ、理科だけじゃすまない……
- 坂田** なるほど。
- 井深** 本当の……心の問題になるんじゃないか……と。実際に、優れた、良い先生たちは、そういうところへ来ているんです。そういう独創性のある先生方……若くて、低学年を受け持った先生方に、素晴らしい教育が出てきているわけですよ。
- 坂田** なるほど。
- 井深** やっぱり五、六年を受け持ちますと、知識ということ、やらざるを得なくなりますけど、一、二年ぐらいですと、まだ、何を教えなきゃならんっていうのが、ありませんからね、“考え方”っていうものにはいついられるんでしょうね。そういうケースを知るにつけても、小さい子どもの教育というのは、考えてみなけりゃならん……っていつてるときに、ちょうど松本の鈴木鎮一先生と……

坂田 ああ、バイオリンの……

井深 ええ、めぐりあいましてね。それから、先生の教え方を見ますと、はじめはバイオリンの問題として解釈してましたけれど、そうでないということがわかってきましてね。

坂田 なるほど。

井深 そこで、その、バイオリン以外の幼児教育を追求していくための場……団体がなくちゃならんんじゃないか、というので……それでこの幼児開発協会が発足したんです。だんだんやっていってますとね、バイオリンというのも、一つの教育の方法なんじゃないか、プロセスなんだ、ということがわかってきましてね。鈴木先生自身も、バイオリンから、だんだん、バイオリンだけじゃない問題にはいってこられてましてね。

坂田 人づくり……というか……

井深 バイオリンをひくってということは、非常に複雑なことですよ。弦をおさえたり、弓をひいて音を出したり、こんな多元的なことが、何故、三歳だの四歳だののこどもに、はいていけるのだろうか、ってというような問題から、いろいろ観察してみますと、どうも、子どもってのは本来、多元的なんですね。

坂田 うん、そう、そう。

井深 それがだんだん教育によって（笑い）ひらべたいものに……

坂田 しちまうんですよね、ええ。

井深 絵なんか見ましても、何か、子どもは、立体的なものを……

坂田 そうです。

井深 表現したい意欲を、非常に……

坂田 持ってます。

井深 電車ってのは、こういうもんだ、汽車ってのはこういうもんだって、だんだん、だんだん、ひらべたくしていく。

坂田 そりゃ、おとなが考えて、そういうふうにゆがめてしまうんですよね。子どもは特徴をとらえるんです。例えば、鼻が非常に大きい、あるいは目と鼻だけあって、耳がないとか……ちゃーんと掴んでるわけですよ。

井深 おとなってのは、バランスばかり考えるんですね。

おとなが分らないものも子どもは分る…

坂田 去年の夏、たまたま美智子妃殿下とごいっしょになりまして……

井深 はあ、はあ。

坂田 浩宮さまが非常に絵がお好きでしてね。その前に、近代美術館にお見えになったことがあったんですが、そのとき御両親殿下も、もちろんおいでになると思っておりましたら、妃殿下はいらっしゃらなかったんですよ。それで、そのとき残念だったというお話をしましたら、妃殿下が、“わかるのか、わからないのか知りませんが、非常に絵が好き

で……”ということでした。 “果してわかるのだろうか”とおっしゃったので、私も実は油絵を、小学校の四年ぐらいからずうっと描いているんですけど、私の見るところでは……おとながわからないものだから、子どももわからんだろうと思うのは、そりゃ、まちがいじゃなからうか、と……

井深 八八八八、そうです。

坂田 本当にいい絵であつたら、抽象であろうと、何であろうと、むしろ、おとなより子どもの方がわかるんじゃないでしょうか。

井深 はい、はい。

坂田 ですから“いい展覧会がありましたときには、ぜひ、おやりになった方がよろしいですよ”って、申し上げたんですけども、私はそういう気持なんです。日本橋に十思小学校という小学校がありますがね……ここはまあ、都の中の過疎というか、以前は五、六百名児童がおったわけですが、いまは百七十名ぐらいしかいないんですよ。そこに幼稚園も併設してあるわけです。何か、吉田松陰のゆかりの場所でもあるそうですが、その絵を見せてもらう機会がありましてね、まず幼稚園の方の絵を見たわけです。そうしますと、実にのびのびとした絵を描いとして……、一年生のところへ行きますね、もうそれがきちんとおさまってしましまして……与えられた画用紙の枠の中にね。幼稚園のときは筆で、大きなものに、それこそ自由奔放に描いてるんですよ。私から見ても、その方がずっと面白いんです。それが小学校へはいった途端に……

井深 きれいな絵になる。

坂田 画一した、きれいな絵になっちゃう。せつかく、四歳、五歳と、幼児の美術教育をやっておられるらしいのに、こういうことになっちゃうては、どうかと思いますなあ、と、申し上げたんですけど……。つまり、そういうようなことが行なわれているんですね。

井深 私も全く先生と同じような経験があります。松本へ行きましたね、二歳半からの子どもの絵が、ずうっとあるんですよ。私、あんまり抽象画は好きじゃなくて、わからないんですけどね、その二歳半のこどもの絵が物凄く生きてるんですよ。

坂田 生きてる！ええ、そう。

井深 私、わからないなりに、これは面白いと思ひましてね、ま、二歳半と書いてあつたのが先入感になってるかも知れんと思つたので、わざわざ東京へ持ってきてもらひましてね、みんなに見てもらつたら“あれはいい”って……絵のわかる方がそういつてくださったので、安心したんですけどね、

坂田 はい、はい。

井深 それがやっぱり、何年、何年って、大きくなるにつれて、だんだん、きれいにはなるけれど……

坂田 そう、そう、そうですよ。

井深 とたんに、つまらなくなっちゃうんですよ。ですから、物の考え方とか、立体観念とか、子どもは、相当あるんじゃないかと思うんですけど。

坂田 全人格的に認識するんでしょうね。

井深 ええ、ええ。

坂田 おとなはね、一つの認識の仕方だけ……定められた法則通りにしか認識しないようになっちゃうんですね……学校教育のために。

井深 ハハハハハ。文部大臣がそういわれるんじゃ、われわれ、ということないですけどね。(笑い)

坂田 いや、いや……本当にそう思います。ですから私はね、小学校一、二、三年でやる学科別の学習というものと、三歳、四歳、五歳児の教育とは、もう少し生活学習的なものに……

井深 そうですね。

坂田 あるいは……美的教育というか、視覚的、聴覚的……ないしは体全体で把握し、認識し、行動する……

井深 思考もはいいですね。

坂田 え、思考もはいりましょう、そういう考え方で幼児教育を考えていかなきゃいかんんじゃないか、というふうに思うんです。

井深 そうなんですね。

二、三歳までは、“生物的”に

坂田 私、最近、幼児教育の問題を考えましたのは……世界の歴史をひもどいてみまして、ですね、中世の末期に一度、人間性というものを弾圧するというか、抑圧するような……教会の墮落やなんかがございましたですね。もともと宗教っていうものは、人間性を守らなきゃならないんだけど、結果として、歴史的にそういう時代を通った……ところがそこで、自然科学というものが発達して……

井深 メカニズムと心と、両方の面で……

坂田 それを契機として、やれギリシャに還れ、やれローマに還れ……人間性を求めた運動、つまりルネッサンスが起って、そうしてまた、三百年か五百年きたわけですね。ところがこんどは、自然科学万能、一切をそういう思考方法で割り切ってしまう、という考え方になってきてしまった……

井深 そういう取り扱いにされてきちゃった……

坂田 そこでこんど、また逆に、自然科学万能が人間性を抑圧する、というか……精神や心や魂に対する、一つの公害みたいな形になってしまった……。そこで私は、もういっぺん、新たな意味において、心を見直してみる必要があるんじゃないか、という考え方に立ったわけです。文明社会と申しますけど、そりゃ、ジェット機にしましても、原子エネルギーにしましても、あるいはラジオ、テレビにしましても、もちろんプラスの面はございますよ、ね。これはたしかに人間の幸福、あるいは社会の幸福、国の幸福という

ことでもあるけれど、しかし同時に……世の中のことは、何もプラスの面ばかりじゃないんですね、マイナスの面もある……そのマイナスの面が多少、このごろは出てきた、と。その面から、人間性を守るということが、当然出てこなくちゃならないわけですよ。簡単にいうなら、文明社会というのはアンナチュラルなるもの、加工された社会という見方もできる……もう少し、人間が人間として存在する以上は、本当にナチュラルな、全人間的な見方と、分析一方でなく、総合的な見方がしかるべきなんでしょう。したがって大学問題だって、学部制、講座別という、カチンとした形じゃなくて、新しい学問領域で見えていこうという見方も出てきた……同時に私たちは、さっきの話のように、おとなたちの目、見方というものを変えるためには、幼児の段階で、美しいものは美しいと捉え、善なるものは善なるものとして、素直に見る教育がなされなきゃならないんじゃないかと思うわけですよ。

井深 私は、ま、幼児教育にも、いろいろ段階がありますけど、一番最初の段階では、非常にメカニカルな、トレーニングというか、“動物的なしつけ”ということで、一番最初の基礎というものはでき上るんだ、と考えるのです。もちろん人間的なもの……母親の愛情とか、そういったものは必要ですけど、基本的な考え方……一番ファンダメンタルなものは、むしろメカニカルな……例えば、人に迷惑をかけないとか、そういうことは、もっと動物的に教えるべきだと思うんですよ。それを妙に道徳とか、修身とか、構えた形でやっつけていこうとする。そういう、むづかしいことじゃなく、もっとシンプルな形で、犬をしつけるのと同じ形で、そういうものを入れるとはいい込む……。ところが二歳、三歳になって、自分というものができてきますとね、その機械的なやり方じゃいけなくなる……そこではじめて、人間としての扱い方というものが出てくるんだけど、その前の期間の教育は、私、非常に重要な意味と力を持つんじゃないかと思うんですけどね。

坂田 それは非常に面白いと思います、それは。

井深 動物的になっていうと、いやな顔される。ハハハハハ。

坂田 まちがわれやすいんですけどもね、実を申しますと、私もいまおっしゃった通りに考えております。

井深 あ！そうですか。ハハハハ。

坂田 という意味は、〇歳から二歳までは、生物、動物の中の人間として捉えなきゃいかん。

井深 ええ、三歳になると、ちょっと考えなきゃいけません。

坂田 え、そこははっきりわからないけど、その前は“生物”の一つであるという認識でとらえるというとらえ方……

井深 ええ、動物として、ね。

坂田 だからむしろ、一、二歳のときこそ、相当なトレーニング的なやり方が必要なんであって、だんだん大きくなってから、いろいろやったって、そりゃもう……

井深 おそいんですよ、ええ、もう。

坂田 おそいし、そりゃ逆効果だ、と……

井深 だから一歳から二歳までのトレーニングっていうものは、相当きびしいものでなきゃいけないんじゃないか、と思いますね。

坂田 外国じゃ、それが相当……

井深 そうです、日本じゃ、ちょっと逆ですよ。

テレビは午前中お休み皿

坂田 お読みになったと思いますけど、さる三月でしたか、ニクソン大統領が七〇年代の教育ビジョン……教育改革に関する教書っていうのを、出しておるんです。そのなかで国立教育研究所を、ことしからつくる、と、そして、それに二億五千万ドル出す……毎年ですよ。ニクソンの案では、そのなかに、生物学者を入れる、っていうんです。

井深 ははーん。

坂田 教育学者だけじゃない……心理学者を入れるまでは、われわれもわかってたんですよ。ところが、心理学、生物学、社会科学の分野のすぐれた学者からなる、常任のスタッフを配するっていうんですね。これはいま井深さんをご指摘になった考え方がひとつあるわけです。……それからもう一つ、貧困家庭の問題……これはワシントンの精神衛生研究所で調べたことですが、それによると、大体、五歳までの生活ぶりが、あとの…

井深 一生全体を規制する？

坂田 すくなくとも十三歳までを決定していく、というんです。しかも、生れてから十四ヵ月から二十一ヵ月の間、スラム街その他、非常に悪い教育条件、生活環境に子どもを置いた場合、もし、第二年目に、適当な教育、あるいは保育をやれば、これはなおる、しかし、この時期を越したら、もう永久にその十字架を背負っていく、と。だからまず貧困家庭のそういう生活環境の悪い子どもこそ、まず早期教育をやるべきだ、という発想からですね。五歳児教育というものに、ひとつのアプローチをしようとしてるんです。

井深 それに対する教育の時間というのは、決して、そう長いものじゃないんですね。

坂田 そうなんです。

井深 くりかえし、くりかえしでいいわけなんだから……。大臣、ご存じかも知れませんが、あの、アメリカのセサミストリートっていうプログラム……

坂田 ええ。

井深 テレビにはみんなかじりつくんですから……相当貧困な家庭でも、どんな家庭の子でも、それは同じなんだから、テレビによる教育をやろう、ということで、フォード財団とロックフェラー財団とで出しまして、三、四歳を対象に、番組をつくってるわけですよ。これが非常に子どもをひきつけて、おとなまでひっぱられてるんですけど……これはテレビのコマーシャル手法によって、子どもを導いていこう、という発想なんですよ。

坂田 これ、あちらでもらってきた資料ですが……これは高校生向けにつくったものですが、

平均一万一千時間が学校で過す時間で、それに対してテレビを見る時間は一万五千時間だって……（笑い）ま、こういうことですからね、テレビというのは……

井深 日本はもっと高いでしょう。この前の生活白書では、十倍ぐらいになっていましたよ。

坂田 日本じゃ活字を見る時間よりも、テレビを見る時間の方が多くなっています。それからもう一つね、イギリスで、来年の一月から、オープンユニバーシティといって、テレビによって、大学を開放するわけなんです。これについて、BBCの意見を聞こうと思ひまして、BBCの会長さんにお目にかかったんですが……そしてまずね“一週間イギリスにいるんだけど、私、まだ、こちらでBBC放送を聞いたことがない。ちょっとかけてみて下さいませんか”といったんです。朝の十時ごろですよ。“いまはやっていません”っていうんですね。

井深 そう、やっていませんですよ、おひるまで。

坂田 九時からテストパターンだけ。つまり相当選択をして、相当お金をかけて、子どもたちのための教育番組を出しているっていうことでしたがね。ところが視聴者側の話によりますとね……これ雑誌の記事になってたんですが……テレビを見るようになってから、子どもが逆に読書欲が非常に盛んになってきて、読計量が上がった、という事実がある、というんです。

井深 はーん、そうですか。

坂田 私はテレビ制作というものは、日本の場合、少し考えなくてはいかんのではないか……ということなんですね。

井深 そうですね。

坂田 ちょっとこれはショッキング……というか、意外な資料でしたねえ……日本の現状とくらべて……。

石童丸と大学紛争

坂田 私、幼児教育のお話をしますときにはね、素人考えで、あっちからきいたり、こっちからきいたりした話の総合なんですけど、三つのことを言っているんです。これは、まあ、特にある雑誌社から頼まれて“零歳から三歳までの教育”ということだったんですがね、私は保育所をやったこともなければ、幼稚園の先生になったこともなし、腹を痛めて子どもを生んだ母親でもありませんから、実際のところ、わかりませんが、しかし幼児教育については関心を持っていますから、その限度でならお話ししましょう、ということだったんですが、その時の話の第一は“まず母乳で育ててください”、というんですよ。つまり、子どもを抱きしめて、ね……

井深 はい、スキンシップの考え方……

坂田 ええ、そして子どもが腹いっぱい、おっぱい飲んで、すやすや眠ったときに……お母さん方はときにはヒステリーで、額にたてじわを寄せたりすることがありましようけど、

そのとき、子どもの寝顔を見ているお母さんというものは、本当にマリヤさんか観音さんの顔みたい……つまり母親としての満足感というものが得られる……その心の状態のときに、子どもの愛情教育が始まるのです、と、これが一つ。それから、コミュニケーションというのは、やっぱり、そういう形が一番いいんだ、と……

井深　そういう形からコミュニケーションが出発するんですね。

坂田　例えばお尻を叩く場合にも、一つの物質みたいにお尻を叩くのと、抱っこして叩くのと……（笑い）ですね、こりゃ、ちがやせんか……。ぼくは科学的に説明できないけども、どうも経験的に、そのような気がする、ということがひとつ。それから第二番目はですね、子守唄をねえ、へたでもいいから、肉声でうたをね……

井深　音程だけははずさないようにしてもらわないと困りますね。ハハハハ。

坂田　ハハハハ。つまり、お母さんの唄で寝かしつけてください、ということなんですよ。

井深　なるほど。

坂田　そのときたまたま、千人か二千人の聴衆がおられたわけですが、私はマイクを通じて話をしてますから、話の意味はもちろんわかりますよ、しかし、私の本当の地声というか、ニュアンスというのは、マイクなしの方が、もう少し魅力ある…（笑い）

井深　そうすると、ちょっと我々の商売に対する侮辱ですね。ハハハハ。

坂田　いやいやもちろん、ソニーの音質は非常によございますけど。（笑い）しかしこれは物質であって、電氣的に音量を拡大しようとしてるのであって、花にしても、卓の上に挿してあるのは生きた花、私が胸につけていただいたのは造花……もちろんつくった花も結構だが、幼児の時期には、やはり朝顔にしても、水をやったり、太陽を当てたり、つまりはぐくむという作用や行動を、子どもたちにわからせなきゃ……あるいは小鳥を大事にして、水をやり餌をやって、生命があるものとして対する……ところがね、このごろデパートでね、都会の子どもは甲虫を二百円で買ってくるわけですよ。そうすると、おもちゃを買ってきたのと同じように、分解したり……殺しちゃうわけですよ。そしてまた、二百円出せばデパートで買えるんだ、ということになっちまってる……。それからもうひとつはね、いろいろテレビや何かの影響を受けましてね、真実なるもの、あるいは実像というものが、見失われてしまって……。最初は、より強調して……ということだったのが、だんだんこれが実像から離れて、虚像になっていってしまうおそれがあるんですねえ、場合によっては、中間の人が意図をもって、別の虚像をつくる場合もあり得るんですよ。

井深　ゆがめて、ですね。

坂田　そして、そのゆがめられたものを、これでもか、これでもか、というふうに、情報が流されると……

井深　一種の公害……

坂田　ついにそれを真実なものと思い込む。ところが何かの機会に、そうじゃない、これは化け物だ、虚像だ、実像は別にある、と思ったときに、非常なむなしさを感じる……怒

りを感じる……それはいったい誰がつくった、おとながつくった、社会がつくった、その秩序を破壊しろ……と、こういうようになってくる危険性がある。ですから私は、この機械文明の中における人間性を回復するためには、子どものときに、何が本当に美しいものであるか、本当に美しい行為は何であるのか、というようなことを、やはり小さいときに見分けをつけておくようにしなくちゃ……おとなになって、理論的に理屈をいって、わからせようたって……

井深 “味”がそうだっていいですね、味が……。

坂田 ああ、そうですか。

井深 小さいときに味覚を……おいしいものを食べさせられると、味のわかる人に……

坂田 ああ、そうですね。それから第三番目ですがね、これが……昔のいいお話ですよ……外国のメルヘン、童話でございますね。童話の意味っていうものが、最近、私、わかってきたわけなんです。いいお話を、小さいとき、お母さんが子どもにして聞かせる……私が小さいとき、うちの母の話を 石童丸の話なんです、よく聞かされました。それきいて、私、泣くわけです。そんならもうやめようか、やめようかっていいですけど、ところが毎晩それ、所望するわけです。

井深 ふーん。

坂田 私、あんまりとりどころのない大臣だといわれて、あるいは“弱腰坂田”なんていわれたんですけど、しかし人情のある大臣とはいわれたと思いますよ。これはどうも、石童丸の話をきいたからじゃないか……（笑い）なんていうぐらいのもので。

井深 石童丸の話ね、八八八八八。

坂田 私の父が八十四歳で、まだ健在でおりますが……父は旧制五高の先生だったんです。それが二歳か三歳のとき……どうも、おやじはかんしゃく持ちだったらしいんです……おばあさんが、“道男、あなたはかんしゃく持ちだ、男がかんしゃく持ちじゃ、大成しない”ということで、太閤さんの話をきかされた……草履とりの話からずうっとされた、ということをおっしゃいました。私は全然、気にも、何もしてなかったんですが、去年、与党からも四面楚歌の声みたいになって、その時私、一人でこの部屋（注・大臣室）へ来まして……“天下の風雲、しばらくしのぶ”とやったわけです。八八八八。そうするとね、ははあ……おばあちゃんの寝物語りが、ぼくの一身に、やはり出てきておる、そして、やはり、“こらえろ、こらえろ”という気持があるわけですよ。このことが何か大学紛争の解決にも、一助になったように思うんで……こう考えてくると、やはり三つ子の魂、百まで、と、昔からいうんだけど、幼児の段階における教育というのは、大事なんだなと思いますね。それをどうするか、ということですがね。

井深 やはり一歳、二歳のころの、機械的な……

坂田 動物という形で、トレーニングをきびしくしなきゃいけないんじゃないか……

井深 私はね、信仰というものも、こどもの時に入れられた信仰と、物心ついてからの信仰っていうものは、こりや全然異質なもんだと考えなきゃならないと思いますね。

坂田 ああ……そうですね。

井深 そういう形で、何でも植えついでしまうんですよ。何でも植えつけられるときに、何をやるか……。明治の人なんかは、みんな論語とか、ああいう……

坂田 ええ、素読で……

井深 素読させられたっていうのは、やっぱり何か、それから出てると思うんですよ。

坂田 思います、思います。

井深 近頃の進歩的文化人からいうと、そういうようなことは、やるべきじゃない、といたいところでしょうけど。

坂田 うん、うん、しかしね、経験的に見てね……

井深 何かあるんじゃないか、と思いますね。それが今の日本じゃ何も無い。教育勅語なんて、あれ、もし悪いところあったら削ってね、もういっぺん改訂版を出すべきだっていう意見もありますよ。取り扱い方は悪かったかも知れんけど、あの内容、悪くないと思うんですがね。何か、そういうふうに機械的にやらせるものを……文句いわないときにインプットするような……そういう形のもの、がほしいと思いますですね。

意志訓練が期待されるのが人間

坂田 この八月に……去年も泳いだんですけども……プールで泳ぎましてね、代々木のオリンピックプールで。私、むかし、玖磨川という川で泳ぎを習ったことあるんですが、もう長いこと泳いだことないものですから、どうかと思ひまして、一、二回練習してみたんですが、結構泳げるんです。二十五メートル平泳ぎで泳いで、それから抜き手と二段抜き手をやりましてね。これ、ま、小堀流の我流ですけども、やったわけです。その時、私、子どもたちに言ったんですけども……“ある動物は生れながらにして、誰も教えないでも泳ぐ”と……

井深 ええ、ええ。

坂田 しかし人間はね、これは泳ぐことを教えない限り、習わない限り泳げないだろう……ということはね……ま、それ以上は言わなかったんですけども、これはひとつ、人間というものが普通の動物とちがう、つまり意志というものを持っている、ということですね。ところが動物というのは、例えば発情期があったりして、生理的に種族本能ができるようにはなっているけれど、人間は意志があって、意志というものが、普通の動物とはちがうものとして与えられている……ということは、意志訓練をやるということが期待された動物なんです、生物なんです。ですからやはり幼児教育から訓練なくしては、練習なくしてはだめなんじゃないかと思うんです。ところが、この二十年の教育っていうのは、何か動物と同じように、放つたらかしてしまって、意志というものの訓練を忘れかけているんじゃないか、ということで、私はやはり、幼児における美的、聴覚的、情緒的な教育をねえ、これはもう、ゲーテ、シラーなんか学問的に言ってることです

し、アリストテレスの頃からもいわれているんですから……

井深 だから、私はね、むしろ形而上のものをさきにやるべきじゃないかしらと思うんですがね。それがね、先程お話がありましたけど、あんなむずかしいこと、子どもはわかるまいというんですけど、モーツァルトの協奏曲をね、五歳ぐらいの子どもが弾いて、本当に、おとなを泣かすような弾き方ができるんですね。芸術とか、高等数学とか、物理にしても、おとながむずかしいと思うものだから、子どももむずかしкаろうと解釈することに、非常にあやまりがあるんですね。

坂田 そうなんです。

井深 いい形でインプットしてやれば、子どもの方が、かえって受け入れられるんじゃないかしらん、っていう気が、このごろしてきてるんですけどもね。

坂田 その点、だから、おとなの考え方を、一度整理して……あるいは見直してみる必要があるんじゃないかかと思えますね。

井深 私はこれをやる前に、平塚先生と大げんか……よくけんかするようですけどね、(笑い) 鈴木先生のなさってること、非常に考えなくちゃいけない。ていったらば、“その子どもたち、三歳や四歳でバイオリンをはじめて、テクニシャンにはなるかも知れんけど、芸術なんてわかるものじゃないですよ”といわれたんで、“それじゃよろしい”と……それから一、二ヵ月たったとき、鈴木先生の全国大会が武道館でありましてね、そこへ行って二千人の演奏を聞いてもらったんですよ。

坂田 ははあ。

井深 それで、平塚先生、すっかりひっくり返りましてね。子どもが掴える芸術性って、ちょっとちがうんじゃないか……かえって本物なんじゃないか……おとなの理屈でこじつけたんじゃないくて……おとなでも芸術性なんて第六感的な面があるでしょうけれども、子どもってというのは、非常に短刀直入ですね。核心にふれられるんじゃないかしらん……こりゃ、ま、想像なんですけども、そういう気がしますね。

坂田 私の二番目の息子が、五年のとき田舎から出てきて、成城学園へはいりました。ところが芥川也寸志さんのお嬢さんもいっしょだったんです。芥川さんが特に「子どもの祭り」というミュージカルを作曲されたんですね。一時間ばかりのミュージカル、非常に生きいきとして、いいんですよ。芥川さんの曲もよろしゅうございますけどね。やっている子どもたちが、もう、のびのびしてるんですね。これにくらべると、あるテレビでやってる、同じような子どものミュージカルなんて、あまりにもキチンとしすぎていて、面白味がないんですねえ。

井深 つけ焼刃と本物のちがいがい。

坂田 ちょっとああいうミュージカル、大人が練習したって、うまくいかないんじゃないかっていうぐらい、アピールする力を持ってるんですよ。もちろん、作曲も指導も相まっているんでしょうけれど、やはり子どもってというのはばかにできません。特に音楽とか美とかいう面ではかなわない。

井深 人の心が、そういうものを掴む第六感といったもの……子どもって、解釈とか表現とかができないだけに……そういう時代はかえって……

坂田 強い……強いんですね。

井深 強く掴むんじゃないかと思いますね。

坂田 これ、私がよくする話なんですけど、私の長女が二歳ぐらいのとき、まあ田舎ですから割合広いうちで、庭も広いんです。私、宣言しましたことは、母親のおばあさんやおじいさんにも、子どもの教育に関しては、私たち両親がやるのであって、おじいさん、おばあさんの介入を許しません、と。

井深 ふん、ふん。

坂田 それからね、下男、下女、これらも、クッチすべからず、と。つまり私たちの方針に従ってもらいたい。例えば大けがをしない限り、ひっくり返って、少々けががしたって…

…

井深 うん、うん、着物、よごそうが……ハハハハハ。

坂田 障子を破ろうが、それはよろしい、と。その代りワンワン泣いている時に、かわいそうって言って、抱き起しちゃいけない、と。自分で立つまでは、こらえて、ひとつ、見守っていようじゃないか、と。まあ、夫婦で約束しましてね、それ、ある程度、まあ、やりました。ところがたまにやっぱり、おじいさんやおばあさんあたりが出てきて“なんちゅう、あんたたちは可哀そうなことをする”というわけで、誰かが抱っこする……そうすると、次には覚えてましてね。

井深 なるほど。

坂田 痛くもなんともないくせに泣いてる……(笑い)そして、もうこの辺でやめようかと、ちょうど思いかかっているときに、おじいちゃんやおばあちゃんが通りかかる……そうすると、ワーン、ワーンって泣き出すんです。(笑い)あの時代から脅迫すること、知っているわけです。

井深 脅迫……ハハハハハ。

坂田 ええ、親を、おとなを脅迫する…この脅迫に負けたら、一生脅迫される……それではいけない……と。

井深 そうでしょうね。

坂田 ことばはあやつれないけど、もう的確に人の心理を……

井深 よんでますね。

坂田 掴むし、人を見ることを知ってますよ。人が何を考えとるか知ってます。

井深 もっとも犬だってそうですよ。自分がかわいがってくれるか、そうでないかということのよりわけができますからね。

坂田 馬だってそうでしょ。乗った瞬間に、こいつうまい、と思ったらおとなしいけど、へたくそだったら、すぐ、はねてみせます。

井深 ハハハハハ。

坂田 むつかしいものですよ。おとなの方が、ことばが話せないから、わかってないと想像してると大まちがいで、二歳、三歳のこどもってというのは、非常に敏感です。だから、それだけに、教育の方法ってというのは.....

井深 もう一歳からはじまってるように思いますね。日本語をしゃべり出すのは、いつからか.....しかしインプットされてるのは、もう六カ月ぐらいから、ずうっとじゃないでしょうか。

坂田 話はちょっとそれますが、有名な日進館で、何を一番最初にやられたかというのと、“童児訓”なんですよ。つまり“修身教科書”なんですね。もうひとつ面白いのは、日進館にいかない、七歳から九歳までの子ども.....それを什の教育といっているんですね。それが八カ条ありましてね、つまり兄貴が弟に教える形なんですよ。ボーイスカウトと同じなんです。

井深 ああ、そうですか。

坂田 つまり、やってはならんこと.....つまり、人に迷惑をかけてはならんとか、目上の人に礼をしなきゃならん、とか、しなきゃならんが八つあるわけです。その中に、私、一番興味があるのは、最後の.....“相成らぬことは相成らぬこと”とある.....

井深 相成らぬこと.....ハハハハ、はっきりしてますね。

坂田 それが、ぼくは非常に好きでしてね、(笑い)相成らぬことは相成らぬこと。

井深 これは本当ですね。

坂田 女と路上で話しちゃならないとかいうのもありますけど、これはたいして興味はない.....この相成らぬこと、が面白いです。これはイギリスのイートンのスパルタ教育の中にもあるんです。この通りが.....これを上級生が下級生に対してピシピシやるという、その形が実は白虎隊みたいなものを生み出したんですね。

井深 実に面白い。ところで大臣、このさいひとつ幼児開発協会の役員にでもなっていたきたいですね。

坂田 私はもう、ざっくばらんで、自分で自由にものを考える方ですから.....その代り勝手なことを申し上げますよ。

井深 きょうはもう、全く同じ意見でございましたね。

坂田 役人の人たちの考えることというのは、型にはまって、一步もそれないんですよ。もう少し美術とか音楽とかやっていると、考え方がひろがりがあるんじゃないかな。

井深 ははん。.....ま、きょうは大変、大臣と意見が一致して愉快でした。ありがとうございました。

おわり